

資料

東南アジアの諸大学と研究者および

学生を交換するプログラムの可能性について

都 留 春 夫

筆者は、1967年7月から1969年3月までの間、外務省の委嘱をうけて、アテネオ・デ・マニラ大学に日本政府が寄贈した日本研究講座の主任教授として、フィリピンに出張した。その期間中に、機会を得て、3度において東南アジアの諸国にある大学を訪問した。特に1969年1月末から2月上旬にかけて、国際基督教大学の学長および副学長の要請により、各大学の代表者に、“A Proposal for Asian Studies”を渡し、協力を得る可能性がどの位あるか下見をする目的で、ホンコン、バンコク、クアラルンプル、シンガポール、ジャカルタを訪れた。この他に、フィリピンおよび台北の事情を加えて報告書にまとめ、1969年2月末に教養学部長のもとに提出した。その後、学長、副学長、学部長のすべてが更迭したこともあり、交換の試みは、まだ具体的に進められる機会が来ていないように思われる。ここに掲載するものは、教養学部に提出した報告書の内容を資料として書きなおしたものである。

各地の事情

I ホンコン

ホンコンは、長い間、香港大学 (University of Hong Kong) だけしかなかったが、近年になって、従来からあった3つの Colleges (崇基・東亜・連合) が合同して中文大学 (The Chinese University of Hong Kong) になったので、いまは、大学の数がふたつになっている。両者ともに Chancellor は香港総督 (Governor of Hong Kong) である。

香港大学では Pro-Vice-Chancellor Thrower 氏および アジア研究所長の King 氏と2日にわたって面会して情報の交換をした。King 氏とは、3月に同大学で開かれた「東南アジアにおける日本研究の発達」に関する会議(The Leverhulme Conference on the Development of Japanese Studies in South East Asia)の時にも話す機会があり、また、後に King 氏が米国に行かれる途中東京に立ち寄られた時に、国際基督教大学に招いてお話しした。この大学は英国の教育制度をそのまま取入れており、6年の初等教育と7年の中等教育を終えた後、大学入学資格(GCEAレベル)を得た学生を入学させている。カリキュラムを単位制ではなく、毎年教科目に登録して、チューターの指導をうけながら論文を書いて提出することによって成績がつけられ、年1回の試験をうけて進級し、資格試験に合格すれば学士になれる。大学に入学してから学士になるまで少なくとも3年かかるようになっている。

このように国際基督教大学と制度が違うので、香港大学の学生が Junior-Year-Abroad のような形で日本に留学して、単位を取って帰っても、香港では通用しないので、留学した期間の長さだけ卒業が遅れることになる。また日本の大学の学士は、ホンコンでは、あまり高く評価されていないので、国際基督教大学を卒業することは、香港大学の在学生にとってあまり魅力があることとはいえない。しかし、King 教授は、将来何らかの形 Junior-Year Abroad に似たプログラムをつくって、同大学の学生を海外に送り出したいとっておられた。

以上のような事情のため、学生交換のプログラムで、最も実現が容易なのは、国際基督教大学が、現在、延世大学(韓国)との間で交換しているような、短期間の交換セミナーであろうといわれた。また、大学院生や若手の研究者を日本に派遣することは、比較的容易に実現できると考えられている。しかし、ホンコンの学生が自費をつかって日本に渡航して勉学や研究のために滞在することは、まず不可能であろうという意見が強かった。

国際基督教大学から留学生または研究者を送れば、香港大学のほうでは、

東南アジアの諸大学と研究者および学生を交換するプログラムの可能性について 171
これを歓迎し、あらゆる便宜をはかりたいという意見が強かったが、奨学金や研究費を負担することはむずかしいと考えられている。

教授の交換については、香港大学の教授が、1カ年の休職を取って日本に行くことはむずかしく、長くても半年位であろうといわれた。国際基督教大学が誰かを香港大学から呼びたいという希望があれば、具体的な条件を示して要求してほしいとのことであった。国際基督教大学から教授が研究のためにホンコンに出張して来れば、香港大学としては、宿舍や研究施設などを提供できる可能性は十分あるが、授業を持ってもらうかどうかは、その時の大学の事情によって違うであろうとのことであった。

香港大学のアジア研究は、ほとんどホンコンの研究にしばられているらしいので、この大学に日本から研究に行くとするれば、ホンコンについての研究に主題をしばるのが一番よいであろうと King 教授はいつておられた。

なお香港大学には留学生として国際基督教大学に来ていた方が社会学科を、元東大の渡辺氏が日本歴史を教えておられる。

中文大学は、大学名が示す通り、中国語で授業をすることをたてまえにしている。現在は3つの Colleges が、それぞれ別のところでほとんど独立して運営しているが、次第に協力態勢が深められて行っている様子がかがわれる。新界地区に広大なキャンパスを持っており、順次新しい建物を建てて、そこに統合する計画を進めている。そのひとつの崇基学院は、UBCHEA (United Board of Christian Higher Education in Asia) を通して、国際基督教大学の姉妹校となっており、学長の令嬢は留学生として来日し、国際基督教大学で教養学士になっている。また、元国際基督教大学講師の北村正直氏が今もこの学院で物理学教授をしておられる。1969年には我妻教授もここで教鞭をとられた筈である。日本政府の寄贈による日本研究講座も、このカレッジにあり、慶応大学の担当になっている。この大学の他のカレッジには、フランス、ドイツ両政府からの寄贈講座もあり、各国の競走のような形になっているが、日本からの寄贈講座は、他国のそれと比べると規模がずっと小さいようであった。この大学では、学長のはからいで、中国文化研究所主任

の薛寿生教授 (Hsueh, Show-Sheng) にお会いした。同教授は行政学の専攻で蠟山政道教授などと旧知の人であった。1969年夏に一般教育についての会議を開く計画を進めておられ、この会議で長教授をはじめ数名の国際基督教大学教授に会えるだろうと楽しみにしておられたが、こちらの都合で、長教授らが出席しないことになったのは残念なことであった。薛教授は、年齢は若いですが、行政的に優れた能力のある方と見うけられ、事務的にきびきびと話しをすすめられた。

中文大学での問題点は、ほとんど、香港大学の場合と同様であったが、薛氏は、ひとつひとつの Proposal について、具体的なプランを聞いた上で、実現可能なものから実施して行きたいので、是非それを示してほしいといわれた。

中文大学としては、現在日本政府から送られた日本研究講座を、独立したプログラムに発展させるのがひとつの課題になっているように思われた。

II クアラルンプル

マレーシアには、大学は国立マラヤ大学しかない。Chancellor は首相がなっているので、筆者が訪問した時にはラーマン氏であった。学長 (Vice-Chancellor) の Aziz 氏は早稲田大学で経済学博士をとられた方で、日本語も堪能であり、来日して久武学長に会われたこともある。非常に忙しい方で、面会の約束がしてあったにもかかわらず、お会いするのに2日かかってしまった。

マラヤ大学 (University of Malaya) は、第2次世界大戦後、シンガポール大学の分校として発足したものが、シンガポールがマラヤから分離して独立した時に、本校からわかれて、独立した大学になったものである。歴史的には国際基督教大学よりも若く、広大な美しいキャンパスに、立派な建築物が次々に建てられており、新興の意気に燃えている様子があふれている。

日本からは平和部隊の隊員が日本語を教えに行っており、外務省を通して日本政府が寄贈した日本研究講座もここにある。学生の間で日本に対する関

東南アジアの諸大学と研究者および学生を交換するプログラムの可能性について 173
心は極めて強く、日本語を学ぶ学生が多い。京都大学の東南アジア研究所が、この大学と緊密な関係を保っている由である。アジア経済研究所も研究員を送っているが、この大学内に研究室を与えられている。地域研究としては、中国研究、マラヤ研究などがあるが、主として語学・文学・歴史を中心にして、文化の伝統を研究するという、以前からの中国学（Chinology）の伝統をふんでいるらしい。

Aziz 学長は、マラヤ大学は英連邦内の大学のひとつで、英本国は勿論、オーストラリア、ニュージーランドなどの大学と近い関係にあるが、他の諸国の大学とも、おおいに学生や教授の交換をして、連絡を密にしてゆく方針をとっているといわれ、国際基督教大学からの Proposal に対しても積極的な反応を示された。現在国際基督教大学の卒業生 1 名を、マラヤ大学の専任スタッフに採用する計画が進められている。また、教授の席が空席になった場合には、公募するから、日本からも応募者を出すことをのぞんでおられた。若手の研究員や大学院生または講師などの交換をするプログラムを考えることは、かなり可能性が大きいと思われる。

学部学生の交換については、ホンコンの場合と、ほぼ同様の問題があり、距離的に更に遠くなるので、むずかしい点が多くなるが、Aziz 学長としては、短期間の旅行では異った国情を知るには不十分であるから、短かくとも半年位滞在させることを考えたいといっておられた。

国際基督教大学からは、すでに、平和部隊員として 3 名位の卒業生が、日本語の教師として、マラヤ大学に行っていたことがある。また、既述の如く、専任スタッフとして卒業生が一人採用される可能性があり、実現すれば、将来は日本研究の主任にしたいという考えがあるらしい。Aziz 学長の積極的な考えかたを考慮に入れると、将来、アジア研究の中心のひとつとして、密接な関係を保つようにするのに適したところといえるであろう。

III シンガポール

シンガポールには高等教育機関がいくつかありますが、大学(University)

と呼ばれるものは、シンガポール大学(University of Singapore)と南洋大学(Nanyang University)の2つである。前者は、はじめから国立大学として出発した総合大学で、歴史は15年位になると思われる。後者は、戦前中国大陸にあったキリスト教主義の大学が、戦後この土地に移って来たもので、UBCHEAの前身であるUBCCC(United Board of Christian Colleges in China)の援助をうけていた由である。シンガポールに移ってからは、有力な中国系財界人の寄付によって、広大な土地を得て、美しいキャンパスをつくって、中国色豊かな建物や内容の大学造りをしている。今ではシンガポール大学と同様国立大学の形式を取っている。学長(Vice-Chancellor)には、1969年のはじめにマラヤ大学から理科系の若手教授を迎えた。南洋大学は、他の英連邦諸大学と異なり、ホンコンの崇基学院と同じように、最近までアメリカの制度を取入れていたらしく、国立になってから英連邦の諸大学と同じになった今でも、国際基督教大学と協力しやすい柔軟性のあるプログラムになっているように思えた。

シンガポール大学では、Deputy Vice-ChancellorのQuahe氏とDevelopment OfficerのPeter Lim氏に面会した。国際基督教大学からのProposalについては、主としてQuahe氏と情報の交換をしたが、氏の反応は積極的で、全面的に賛成だが、もっと具体的な案が知りたいといわれた。ここで問題になったのも、ホンコンやクアラルンプルの場合と同じで、英連邦のひとつであるため、豪洲、ニュージーランド、マラヤなどの大学との関係が深く学生、研究者、教授の交換が盛んにおこなわれているが、日本やアメリカの大学の卒業生に対する評価は低く、英連邦諸大学の卒業生と同等の資格は与えられないのが普通である。この点、シンガポール大学で学士号を得てから日本に行って、修士や博士の課程を修めに来るほうが、資格の上では有利になる。したがって、ここでも、大学院学生や、若手研究者を日本に留学させることが、最も可能性のあることと思われる。

75%の国民が中国系であり、戦後英国の支配から離れて独立したシンガポールの大学としては、英連邦以外の大学との連絡を強めたい意欲が強くある

東南アジアの諸大学と研究者および学生を交換するプログラムの可能性について 175
ように見うけられる。同じアジア人としての日本人に近親感をもっているよ
うにも感じられ、学生や教授を日本から迎えることについても乗気な様子で
あった。

南洋大学では、Acting Vice Chancellor 他数名の教授にお会いする機会
を得た。中でも、東南アジア研究所所長の Dr. Jacen T Hsieh (謝)は国際
基督教大学からの Proposal の写しを作って持っておられ、熱心に、ひとつ
ひとつの項目について、具体的な考えを示された。その意気込みは、どれか
らでもいいから、すぐにでも、できるものから実現させたいという気持があ
ふれているように見うけられた。

この大学にはカナダ人の教授もおり、アメリカや日本の大学で学位を取っ
て来た教授もいた。Hsieh 氏をはじめ数名の教授は熱心なクリスチャンで、
日本から学生が来れば、よろこんで迎えるし、南洋大学の Student Chri-
stian Fellowship のメンバーが非常によろこぶであろうといわれた。是非
とも、そのような学生交換のプログラムを考えてみたいから具体的な案がで
きたら知らせてほしいという希望が出された。

教授交換としては、南洋大学と国際基督教大学の間では、蕭(Show) 教授
が、毎年往復しておられる例もあり、条件さえそろえばいろいろな形での交
流が考えられるであろう。Hsieh 氏自身経済学の教授で熱心なクリスチャン
でもあり、交換教授のプログラムに個人的にも深い関心を持たれたように思
えた。

私の印象では南洋大学は、将来、いろいろな形で交換プログラムを実施す
るのに最も適した大学のひとつであるように思えた。

IV バンコク

タイ国の学生は英語がほとんど話せないので、交換学生ということを考え
ると、まずことばの問題で大きなハンディキャップがある。日本人がタイ国
に行って学ぶには、タイ語の修得が必須になる。勿論、昨年まで国際基督教
大学にいて、教育学修士を取得した留学生のように、英語のできる学生を選

んで交換するようになれば可能ではあるが、日本から行く者は、学生にせよ、研究者にせよ、教授にせよ、十分に目的を果たすには、タイ語が使いこなせることが是非のぞまれる。

タイ国人の学生は、フィリピンの場合と同様、ホンコン、マレーシャ、シンガポールに比べると、年令的に若いように思えた。現在、日本研究講座は、バンコクのタマサト大学とチュラロンコン大学に置かれている。大学は、タイ国内には、上記の2つの他にもいくつかあるが十分に調べることはしなかった。

タイ国の大学と国際基督教大学の関係をどうするかということについては、前に久武学長がチュラロンコン大学を正式に訪問しておられるので、私は特に当局者と会って話すことはしなかった。

V ジャカルタ

インドネシアについても、タイ国の場合と同様、私が訪問する半年前に、久武学長が訪問しておられるので、正式に大学の代表者と面接する予定はつくらず、ジャカルタにあるインドネシア大学の日本研究講座を訪問し、関係のある教授たちにお会いしていろいろ事情を伺った。

インドネシア大学 (University of Indonesia) は、戦後にできた若い大学のひとつであるが、新興の意気を明らかに反映しているマレーシャやシンガポールの大学と比較すると、施設もずっと貧弱に見えるし、経済的な余裕も乏しく、まだ十分に最高学府としての形がととのっていないように見うけられた。日本研究講座の授業のために使用している紙などの文房具は、すべて日本政府から支給をうけているとのことであった。研究室の多くは——文学部の部屋であったせい——机と椅子があるのみで、書類も、資料もほとんどなく、タイプライターも置いてないようであった。日本研究を担当するために日本から派遣されている教授の意見では、この大学の現状は、まだまだ研究がすすめられる態勢になっていないとのことであった。いまのところ日本からの援助が強くのぞまれるが、交換プログラムを積極的にすすめるよう

東南アジアの諸大学と研究者および学生を交換するプログラムの可能性について 177
に考えるのは、まだ早すぎるように思えた。

しかし、現在日本研究講座を受講している学生のなかには、将来が嘱望される者がおり、これらの学生に対する大学院教育をおこなうことを積極的に考えることがのぞまれる。特に日本語教育の専門家を養成することがのぞまれているが、このことを可能にする方向に国際基督教大学の大学院が発展して行くことが考えられてもいいのではないかと考えられる。

インドネシアの学校教育制度では、学部の卒業生は、日本の学生よりも1年若くなるので、インドネシア大学で学士になった学生は、日本の文部省の研究留学生になるには、卒業後1年勉学をつづけたものでないと資格がないことになっている。このことが、インドネシア大学の卒業生の日本留学意欲を弱める原因になっているといわれる。日本の大学が、インドネシア大学の卒業生をいちおう大学院生として受入れたうえで、必要な数だけ学部の単位を取らせるような、米国流でいう **Unclassified Graduate Student** にするような措置をすることができれば好都合ではないかと考えられる。

VI タイワン

タイワンは、中華民国台湾省でありながら、同国政府の支配下にある唯一の領土であるという特殊事情の下にあり、軍事的にもむずかしい状況があるように思える。現在中華民国政府は、大学学部在学中の学生が留学生という資格で国外に出ることを一切禁止しているといわれている。短期間の旅行であっても、学生が国外に出ることは許されていないので、日本の大学と学生の交換をすることは、いまのところ全く不可能であるといわれる。

大学院生については、兵役2年を終った者であれば留学を許す由である。

日本からの学生が、タイワンの大学に入学することは可能であるといわれた。教授の交換ということも、タイワンの大学では積極的に進めることはしていない由である。国際基督教大学物理学教授原島鮮博士が東海大学に行かれたというような例は、まだ数少ないとのことであった。

一般にあって、タイワンでは、現在、若い学生が日本に対して興味をもつ

ことは、あまり望ましくないとされている由で、先に、日本政府が、日本研究講座を寄贈しようとした時には、中華民国政府がことわったといわれている。しかし、タイワンの住民一般、特に従来からこの島に生れて育ったひとたちの日本人に対する感情には、非常にしたしみがこめられているように感じられた。

VII フィリピン

フィリピン人の対日感情は、15年前には非常に悪かったが、現在では、すっかり変っていて、日本に対して、一種のあこがれ、あるいは、うらやみのような感情すら見うけられるようになっている。

フィリピン大学の教授のなかには、日本の戦後の経済発展に対して警戒の眼をむけていて、好感情をもっているとはいえないひともあるが、一方では、かなり多くのひとたちが——学生も含めて——機会があれば日本に行ってみたいし、またことばの問題がなければ、日本で高度の研究をして学位を取りたいと考えている。

国立フィリピン大学(University of Philippines)にはアジア研究所(Asian Studies Institute)があり、Dr. Sanial という日本研究の専門家が Program Director になっている。欧米からは、かなりの数の教授が、いろいろな形でこの大学に席をおいている。日本人としては、コロンボ・プランの海外技術協力員として、日本語の教師が行っており、また平和部隊の隊員で、体育の教師になって、この大学に配属になっている者もある。この大学には日比学生会というクラブがあり、毎月集会を開いている。日本からの留学生も10名位はいると考えられる。

筆者が送られていた Ateneo de Manila 大学は、カトリック系の大学で、東京の上智大学の姉妹校に当る。私立大学では最高の学府で、国立大学と肩を並べている。数年前から、上智大学との間に学生交換プログラムが成立し、毎年学部の学生が20名位、日本からフィリピンへ、フィリピンから日本へ旅行し、共同セミナーなどを開いている。

アテネオ大学にあるフィリピン文化研究所 (Institute of Philippine Culture) と京都大学の人文科学研究所との間には連絡がとれているようである。この研究所の助手は日本に留学しており、国際基督教大学の大学院にも在学している。1969年春まで三鷹キャンパスに来ていたゴーシェンフィヤオ氏は、アテネオ大学の助教授で、現在は日本研究講座の主要なスタッフのひとりになっている。この大学に日本国政府が寄贈した日本研究講座については、国際基督教大学が担当することになっており、現在までに、久武教授、都留教授、佐藤助教授、一瀬教授が主任教授として赴任している。

上智大学からは、毎年2名の大学院学生が、アテネオ大学から与えられる奨学金を得て勉学をつづけているが、これらの学生は、また、アテネオ大学付属高校で日本語を教えている。

すでに、上記のような関係ができているので、アテネオ大学と国際基督教大学の間で、いろいろな形の交換プログラムを持つことは十分考えられそうである。

フィリピン大学、アテネオ大学と並んで一流の大学と考えられているのが、ネグロス島にあるシリマン大学で、この大学は、UBCHEA を通じて、国際基督教大学とは姉妹校の関係にある。数年前に教授交換のプログラムの提案が送られて来たことがあるが、実現に到らなかった。同大学の学長カルデロン氏の令嬢は、数年前に三鷹に留学して来ていた。この大学と国際基督教大学の間では、もっと盛んな交流があつて当然のように思える。

かつて、ワーフェル元国際基督教大学教授が、フィリピンにおられたことがあり、熱心にあっせんされたので、フィリピンからの留学生を招くための奨学金がもうけられ、毎年マニラの日本大使館を通して留学生を募集選考をしていたことがある。その時マニラにできた選考委員会は、今でも存続している筈であるが、奨学金がなくなっているのので、留学生の募集も数年の間していない。

フィリピンからの政府留学生の数は年々増加して来ており、その中には、国際基督教大学を目指して来る者もいる。フィリピン人で日本語が教えられ

る人を養成する必要がある、そのための大学院コースの準備ができることがのぞまれる。フィリピンの学校制度では、大学卒業生の修学年数（小学校から大学まで）が日本より1年少ないために、大学院入学生は、フィリピンの大学卒業後、1年勉学を続けないと、直接日本の大学の大学院には入れなくなっている。

む す び

今回の東南アジア諸大学訪問の結果を総括してみると、この方面に行っている日本人学者、研究者、教育者、学生の数はまだまだ少なく、この地域について日本人が持っている理解は、欧米人に比べてずっと少ないように思われる。ひと口に東南アジアといっても、国毎にかなり実状が異なる。それぞれの国の文化についての研究が、日本人の手でもっと盛んに行なわれることが期待される。

各国のひとびとの進歩と発展のために、われわれにできることはいくらかあるといえるであろう。これらの国々の学者や文化人は日本人との交流を深めることは望ましいことだとしている。

国際基督教大学が提起した、アジア研究に関する Proposal は、時期を得たものであったと考えられ、何処でも歓迎され、詳しい具体案をつくって連絡することを期待された。ひとつひとつ実現可能なものから計画を練っていくことが強くのぞまれる。

筆者の見るところでは、もし1, 2カ所から手はじめとして連絡をつけて行くとすれば、すでに開拓されつつあるフィリピンの他には、シンガポールの南洋大学やクアラルンプルのマラヤ大学などとの間が、比較的容易に実行可能なプランができそうに思える。ホンコンの香港、中文両大学も考えられるが、東南アジアとの連絡としては、やや片寄りすぎており、英領であって独立国でないということが、多少異なった条件になっていると考えられる。